

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

Japan Inc.その中枢の凋落

石積 勝

3月14日榊原先生の退職記念最終講義を拝聴させてもらった。「米国と日本：教育と研究」というタイトルでのお話であった。

講演前半では日米の大学で研究、教育にあたられた経験から比較の視点でお話くださった。研究面では米国の教員は、特に若手の教員はかなり厳しい競争にさらされておりその後のキャリアで待遇面でも大きな差が生まれること、またアドミニストレーション的業務にかかわることもあまりなく、もっぱら教育活動に学期中は集中できることなどが紹介された。やはり両方の現場に実体験として長年身を置かれてきた方のお話だけに、大変リアリティーのあるものだったと思う。講演後半では先生の専門分野である日本的経営の比較研究のお話をされた。特に米国時代には日本的経営がもてはやされていたこともありこの分野の注目度は高く、それこそ研究資金獲得や自身の論文の引用件数の多さなどについても言及され、大変充実した教員生活の様子がうかがえ知れるお話だった。

質疑応答の時間になり、私はマイクを握り、まず先生の長年の経営学部への貢献に採用時の元学部長として改めて感謝を申し上げた。そして質問として、日本人学生と外国人学生の比較をお願いしたが、じつは、私にはもう一つ別な質問が本当はあった。それは「先生は講演で日本的経営の強みについて縷々説明してくださったが、その強いはずの日本的経営の現在について、先生はどう考えておられるか？」ということだった。

先生が、成功している日本的経営の謎を説明できる、日本の外にいる、数少ない経営学者として活躍されて

いた時期とダブるのではないだろうか。私も、1980年代の前半ニューヨークに住んでいた。日本はまさに **Rising Sun** であり、『Japan as No1』(エズラ・ボージェル)も話題になっていた。その中心に、日本的経営が羨望のまなざしを受けながらどっかりと座っていた時代であった。「日本的経営—三種の神器(年功序列制・終身雇用・企業別組合)」が日本企業の競争力の源泉として語られ、「Japan Inc. (日本株式会社)」も「State Capitalism(国家資本主義)」も「護送船団方式 (Organized convoy system)」も、つまり個人ではなくチームで動く日本的経営は、あるいは日本の経済運営は脅威であると同時に成功モデルとして語られていた。そしてそのシステムを牽引するのは、優秀で私心なく天下国家のために尽くす日本の官僚であると見られていた。官僚の優秀さこそが日本の成功の秘密であるとみられていた。

先生への私の質問は、じつは日本の成功の中枢であり続けてきたこのキャリア—官僚の現在についてであった。8年前に私は次の様な文章を書いている。

「アドミニストレータ (の話) に戻ろう。昔流に言えば『お上集団』であろうし『エリート層』『指導層』ともいえる。そのアドミニストレータが次々に膿を一般市民の眼前に恥ずかしげもなくさらけ出している、その状況が1980年代以降連綿と続いている。ノブレス・オブリージュ (エリートの社会的責任感、矜持) がこの国では消えてなくなったようだ。日本国民は漠然とした不安の中にあると思うが、それはもちろんまずこの国の経済であり、そこに丸ごと依拠するひとりひとりの生活である。しかし『不安感』はもう少し大



榊原先生最終講義 2018.3.14

